

資料

愛媛県燧灘における「がにづり（かにすくい網）漁業」

安永由浩<sup>1</sup>・渡辺昭生<sup>2</sup>

The Crab Dip Net Fishery carried out in the Hiuchi-Nada of Ehime Prefecture  
Yoshihiro Yasunaga, Akio Watanabe

The Crab Dip Net Fishery is a method of traditional fishery using a gear which drew a thread between the frameworks like a reversed umbrella. It is rarely used in Ehime Prefecture at present. Taking account of the declining trend of traditional fisheries, it is worth while to keep the method of fishing on record. This report describes the outline and the record of the Crab Dip Net Fishery in the Hiuchi-Nada, Ehime.

はじめに

著者らは、愛媛県の伝統的漁業について、操業形式及び漁獲方法を記録することを目的とし、県内各地で現地調査を行ってきた。「がにづり」とはすくい網漁業の1つに分類され、一般には、かにすくい網漁業と呼ばれる(金田1994)。本稿で取りあげている「がにづり」は、かにすくい網漁の地元での呼称である。現時点では漁業自体がほとんどなく、また、操業の経験者も高齢なため、早急な調査が必要であると考えられた。

今回、昭和30年代まで燧灘西部海域で行われてきたがにづり漁業について、操業実態や操業方法について記録を残すため、操業経験者から聞き取り調査を実施するとともに、かつての漁獲作業を再現し映像撮影を行った。操業の再現は2002年10月21日に実施し、聞き取り調査は2005年12月に、操業経験のある3名に対して行った(表1)。

がにづり漁業の概要

がにづり漁業が操業されていた燧灘西部は西条市に面し、海岸は単調で遠浅である。現在は主に底びき網漁業及び刺網漁業が操業され、冬期には海苔養殖が行われる。がにづり漁業の漁獲物であるガザミの漁獲量も多い。

がにづり漁業は愛媛県漁業調整規則における許可漁業でないため、自由漁業に該当すると考えられるが、現時

点では操業者がほとんどいないため明確ではない。なお、愛媛県の近県では、香川県備讃瀬戸でも操業されていた(香川県農林水産部水産課1998)。

操業形態

聞き取りによると、7月から11月(河原津地区)、ま

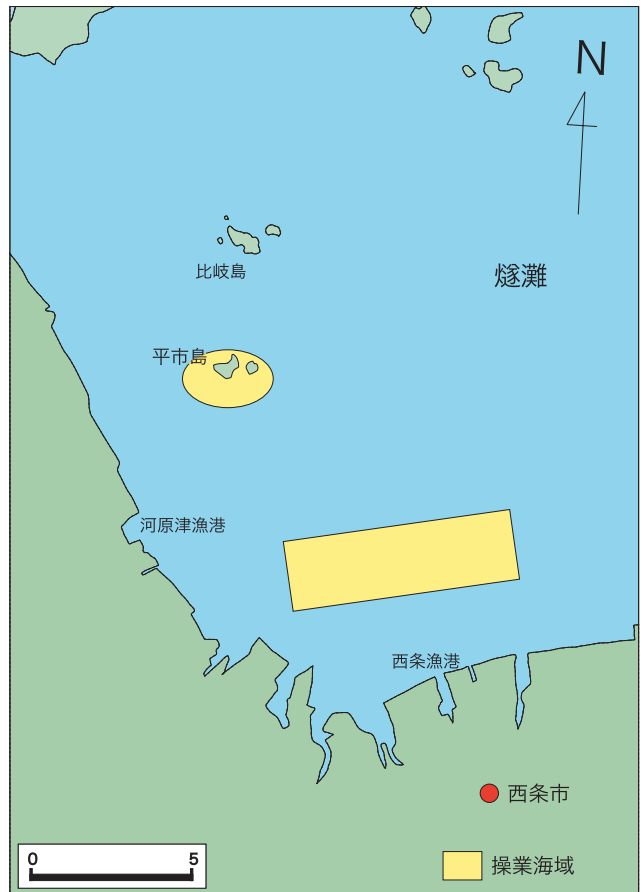


図1 操業海域 聞き取り調査により作成

1 愛媛県総合科学博物館 学芸課 産業研究科  
Dept. of Industry Ehime Pref. Science Museum

2 愛媛県中予水産試験場東予分場  
Ehime Prefectural Chuyo Fisheries Experimental Station Toyo Branch

たは9月から11月（西条地区）にかけて操業していた。操業時間は8時間程度であったが、昼夜関係なく操業していた。河原津地区の漁場は平市島周辺～河原津より距岸1,500メートルの海域、西条地区は加茂川河口沖合3,000メートル付近海域であり（図1）、両地区とも漁場は、やや沖合域に形成されていた。なお、聞き取り対象者全員が、重要なガザミの餌であるホトトギスガイ（底生性二枚貝）群集付近にガザミ漁場が形成されていたと認識していた。干潟に着底したガザミは成長とともに沖合に移動することが知られており（塩田1992）、商品価値の高い大型のガザミを漁獲するために沖合域で操業したと考えられる。1日あたりの漁獲量は10kg程度と推定されたが、その年の資源量や餌環境により大きく変化したようであった。終戦直後のがにづり漁業の操業者は河原津地区で約300人、西条地区で約100人であったが、対象地区の漁業者のほとんどが実施していたのが実状であったと考えられる。がにづり漁業が開始された年代は明確でないが、少なくとも明治中期には開始されていたと考えられる。昭和30年代までは、がにづり漁業がガザミを漁獲する主要な漁法の一つであったが、漁業効率の良いかにかご漁業やかに建網漁業への転換により急速に衰退し、現在は正規の漁業としては操業されていない（表1）。

### 漁具の形状

がにづり漁具の一般的な作りは、伝統的漁具漁法等収集伝達資料（愛媛県水産局水産課1988）に詳しい。本調査で使用した漁具は、傘を逆にした形状で、直径37cm、高さ28cm、重量1.37kgであった。鉛で鑄こんだ部分から縦方向に太さ9.5mmの針金が1本、横方向に太さ4.1mmの針金が8本放射状に固定されている。横方向の針金は先端部を高さ6cm程度曲げて返しを作り、針金の隙間に糸を張り、引き上げ時にガザミが落ちないようにしている。縦方向の針金と竹を並べて一緒にタオルで巻き、針金だけに比べて餌が固定しやすい工夫をしている（写真1, 2）。操業されていた当時の材料は、鉄の針金・鉛・木綿糸であった。腐食やもつれの防止に、糸に柿渋をつけていた。また、漁具は自家製であり、大きさや返しの高さは人によって異なっていた（表1）。

### 操業方法

がにづり漁業は、（1）漁具への餌の取りつけ、（2）漁具の投網、（3）漁獲の確認・引き上げが主要な作業であり、通常一人で操業する。

#### （1）餌の取りつけ

漁場に到着後投錨し、漁具に餌を取りつける。餌の魚は、背開きにして内臓ごと中央部の軸に巻き付け、外れないように紐で縛る（写真3・4）。餌についての聞き取りでは、「トラフグが最も良かった。そのほかはチヌ、内臓をつけたまま開いてつけた。」（河原津地区）、「延縄で獲れた魚（ネズッポ、カレイ、フグ、ハゼ、ペラ）など、新鮮なものが良かった。」（河原津地区）、「カレイが多く獲れていたのでカレイを使った。切り目を入れて道具に巻き付けた。」（西条地区）とあり、漁業者や地域で違いがあった（表1）。

#### （2）漁具の投網

餌をつけ終わると、漁具につけた紐の一方を船に結び、下手投げで海に投下し、漁具との紐が緩み過ぎないように船に固定する。同様に、残りの漁具も投下し船に固定する（図2、写真5・6・7）。聞き取りでは、1人で6丁使用していた（表1）。

#### （3）漁獲の確認・引き上げ

最初、静かにたぐり寄せ、紐のたるみをとる。紐を指に巻き付け滑らないようにし、勢いよくたぐり寄せる。漁具にのったガザミは、引き上げられるとき、水の抵抗で漁具の底に押しつけられ動けなくなる。たぐり寄せる手応えで、ガザミが漁具にいるか判断する。ガザミが漁具にいる場合、手を休めず海上に引き上げる。ガザミがいない場合、たぐり寄せをやめるか、一度引き上げてから再び海に投下する（写真8・9・10）。1つの漁具で作業を終えると、残りの漁具にも同様の作業をする。餌が食べられてしまうか、ガザミの寄りつきが悪くなると、船上に引き上げ、新たに餌を取り付ける。

なお、操業の再現は、2002年10月21日の午後2時から

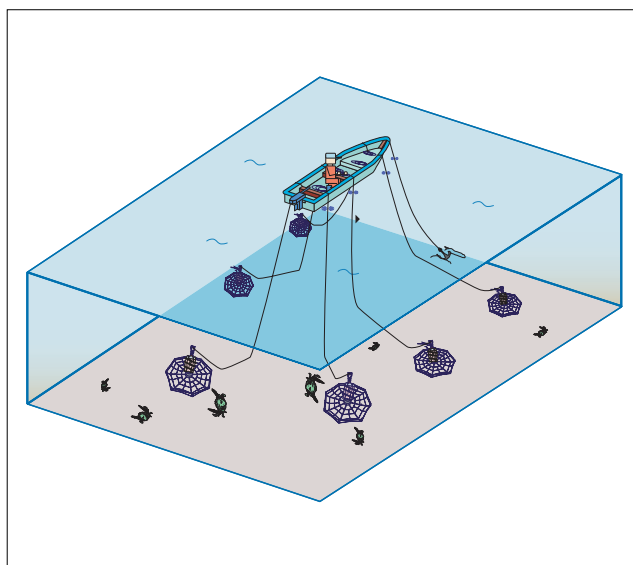


図2 操業図

3時30分にかけて河原津漁港沖合500mで実施した。当日の天候は、晴れであった。餌には冷凍のコノシロを使用し、2丁のがにづり漁具で操業した。この操業でイシガニ4匹及びガザミ4匹の漁獲ができた。

## おわりに

がにづり漁業は昭和30年代前半に、より漁獲効率の高いかご漁業やかに建網漁業へ急速に転換が行われ、現在では漁業としての操業実態はなくなっている。がにづり漁業は、漁の間絶えず漁具の投網、引きあげ作業が必要であり、1隻あたり6丁程度しか漁具を使用できなかった。対して、かご漁は、漁具の設置後、時間をおいてから引き上げる作業で漁獲ができ、かごを多数設置することで漁獲量を上げることができた。そのため、がにづり漁がかご漁に転換するのはごく自然な流れであったと考えられる。このように漁具漁法の近代化により、伝統的な漁業が急速に衰退しており、漁村文化の伝承の意味からも伝統漁法資料の収集は価値が高いものと考えられる。今後とも、継続的に調査をすすめることで、消えゆく伝統漁業の記録を残し、愛媛県の漁法の変遷を伝える資料の一つとしていきたい。また、映像資料については、学校等から要望があれば貸し出し、教育普及にも役立てていきたい。

## 謝辞

西条市在住でがにづり漁経験者の榎哲一氏には、がにづり漁業を再現していただくとともに聞き取り調査に協力いただいた。西条市在住の曾我部敏弘氏には、漁具を提供していただいた。河原津漁業協同組合の川又文丸組合長及び西条漁業協同組合藤田国博組合長には、漁が実施されていた当時の様子についてご教示をいただいた。ここに記して深く御礼を申し上げます。

## 引用文献

- 愛媛県水産局水産課（1988）：かにすくい網漁業伝統的漁具漁法等収集伝達資料 瀬戸内海地域。愛媛。p 4-5
- 香川県農林水産部水産課（1998）：Ⅲ．消えた漁業，消えゆく漁業 かにすくい網。香川の漁具・漁法・魚。香川。p29
- 金田禎之（1994）：第9章 すくい網漁業。日本漁具・漁法図説増補改訂版。成山堂。東京。p423
- 塩田浩二（1992）：ガザミの稚ガ二期における移動分散。愛媛水試研究報告5。愛媛県水産試験場。愛媛。p 1-11

表1 がにづり漁業操業経験者に対する聞き取り調査内容

聞き取り内容	河原津地区1 (河原津漁業協同組合)		河原津地区2 (河原津漁業協同組合)		西条地区 (西条漁業協同組合)	
	がにづり	がにづり	がにづり	がにづり	がにづり	がにづり
問1 この漁を何と呼んでいますか？	がにづり	がにづり	がにづり	がにづり	がにづり	がにづり
問2 何年頃からこの漁業は始まりましたか？ (又は始まったと聞きますか？)	大正時代には始まっていたと聞いている	大正時代には始まっていたと聞いている	遅くとも戦後には始まっていた	遅くとも戦後には始まっていた	明治中頃から使われていたのでは	明治中頃から使われていたのでは
問3 何年頃までこの漁業は行われていましたか？	昭和35年頃まで	昭和35年頃まで	昭和中頃まで	昭和中頃まで	昭和30年頃くらいまで	昭和30年頃くらいまで
問4 漁具の名前を何と呼んでいましたか？	ガニヅリ道具	ガニヅリ道具	カニヅリ道具	カニヅリ道具	自家製	自家製
問5 漁具はどのようにして入手していましたか？	自家製	自家製	自家製	自家製	自家製	自家製
問6 漁具はどんな材料で作っていましたか？	鉄、鉛、細い糸 使っていたのはその漁具より半径で1.5倍、 返しの高さは約2倍大きかった、人によって 漁具の大きさは異なっていた	鉄、鉛、細い糸 使っていたのはその漁具より半径で1.5倍、 返しの高さは約2倍大きかった、人によって 漁具の大きさは異なっていた	鉄、鉛、たこ糸 たこ糸は渋柿のしぶを塗って硬く伸びないよ うにする	鉄、鉛、たこ糸 たこ糸は渋柿のしぶを塗って硬く伸びないよ うにする	木綿糸、鉄、鉛 木綿糸は柿渋に付けて腐食、もつれを防止し た	木綿糸、鉄、鉛 木綿糸は柿渋に付けて腐食、もつれを防止し た
問7 漁に何個くらい漁具を使っていましたか？	6丁	6丁	6丁	6丁	6丁	6丁
問8 餌に何をつかっていましたか？ どのように餌をつけていましたか？	トラフグが最も良かった、 その他チヌ、内臓をつけたまま開いてつけた	トラフグが最も良かった、 その他チヌ、内臓をつけたまま開いてつけた	延縄で獲れた魚、 ネズッポ、カレイ、フグ、ハゼ、ペラなど、 新鮮なのがよい	延縄で獲れた魚、 ネズッポ、カレイ、フグ、ハゼ、ペラなど、 新鮮なのがよい	カレイ 切り目をつけて巻き付けた	カレイ 切り目をつけて巻き付けた
問9 1年の内、いつ頃漁をしていましたか？	7～11月	7～11月	9～11月	9～11月	9月～11月(当年発生のガザミ)	9月～11月(当年発生のガザミ)
問10 何時頃からとりはじめて、 何時くらいまで漁をしていましたか？	8時間、いつでも釣れたが、自分だけが 知っている漁場へは暗くなってから操業した	8時間、いつでも釣れたが、自分だけが 知っている漁場へは暗くなってから操業した	24時間する人もいたが、 私は朝から夕方まで操業した	24時間する人もいたが、 私は朝から夕方まで操業した	昼夜と漁をした いつやるかはその漁師によって違った	昼夜と漁をした いつやるかはその漁師によって違った
問11 燧灘のどの辺で漁をしていましたか？	平市島周辺～距岸1,500mまで、 浅いところでは小さいガザミしか釣れないた め	平市島周辺～距岸1,500mまで、 浅いところでは小さいガザミしか釣れないた め	平市島周辺	平市島周辺	加茂川河口から沖合3,000mほど 平市島との中間くらいまで	加茂川河口から沖合3,000mほど 平市島との中間くらいまで
問12 ガザミ以外にどんな魚介類が獲れましたか？	ほとんどとれた記憶がない	ほとんどとれた記憶がない	ほとんどとれた記憶がない	ほとんどとれた記憶がない	ガザミのみ	ガザミのみ
問13 1日でどのくらいとれましたか？(漁獲量)	通常は10kgまでであるが、 30kg程度漁獲したことを聞いたことがある	通常は10kgまでであるが、 30kg程度漁獲したことを聞いたことがある	多い時で日に10kg 10kg～20kg	多い時で日に10kg 10kg～20kg	ざる2杯 50匹～100匹	ざる2杯 50匹～100匹
問14 当時どのくらいの人が この漁をやっていましたか？	昭和10年には300人いた	昭和10年には300人いた	昭和20年代後半には河原津で 少なくとも30人くらいいたと思う	昭和20年代後半には河原津で 少なくとも30人くらいいたと思う	100人	100人
問15 がにづり漁をやめた理由は何かですか？	刺網とかにかごに移行した	刺網とかにかごに移行した	かにかごに移行した	かにかごに移行した	昭和30年頃からのがに建(かに建網 化学織 維による建網の普及) 同34年頃、がにくら (かにかご)の方が楽で効率がよく、皆やめ ていった	昭和30年頃からのがに建(かに建網 化学織 維による建網の普及) 同34年頃、がにくら (かにかご)の方が楽で効率がよく、皆やめ ていった



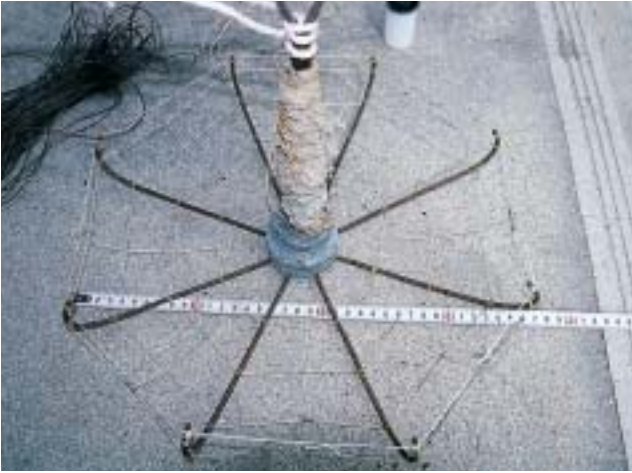


写真1 がにづり漁具



写真2 がにづり漁具



写真3 餌の取りつけ



写真4 餌の取りつけ



写真5 漁具の投網



写真6 漁具の投網



写真7 漁具の投網



写真8 漁獲の確認・引き上げ



写真9 漁獲の確認・引き上げ



写真10 漁獲の確認・引き上げ